かと思う。

6章の「信仰」では、寺社、家・地域の神仏、講信仰、オシラサマ、民間宗教者、シチカムラ、その他の項目による記述である。採集資料を主としているが、個別の事例が少なく、地域の信仰的特質を把握することが難しい場合は、岩木周辺地域との資料比較を試み、民俗解説があってもよいかと思われる。

寺社の項については、『旧岩木町史』を参考にするのであれば、本章では無理に取り上げる必要があるのであろうか。

7章の「民俗芸能」では、津軽地方では種類は多いとはいえない。そのなかで岩木地区の獅子踊りを中心にまとめている。調査では、伝承の消失した集落や中断、休止から復活を果たした集落も含めて記述している。具体的な記述は、概要、歴史的経緯、組織、演ずる年間の行事、唄という細目を設定し、獅子踊り集団の特徴をまとめている。しかし、一方、芸能の項目のなかにお山参詣、ねぷた、百万遍など「信仰」や「年中行事」と重複する項目が並んでいるが、この章を構成する基準がよく分からない。

8章の「口承文芸」は、話者が激減し、採集が難しいとされている分野である。冒頭に昔話、伝説、世間話との分類基準が示されている。特に導入部では、昔話が語られる場、季節、話者についての解説がみられる。伝説では水部、山の部、祠堂の部、家の部、習俗の部など地域色を捉えた分類を行っている。

9章の「工芸」では、一般に生業または民具のなかで記載される項目であるが、岩木地区はアケビズル細工・竹細工が特に盛んであったため1章を設けたのであろう。

内容は、作られる製品の種類、製品となるまでの材料の入手から完成までの製作技術が主な記述である。

本書は、津軽において数少ない民俗誌の一つといってよいのであるが、章ごとの記述には、それぞれ個性があり、地域の特質をうまくまとめ概説的な章や個別の説明とともに概況を設ける章、資料を羅列的に記述する章、事例についての分類が不明確なままの記述など全体的に一貫性が欠けているように思われる。しかし、執筆者の調査による資料を基に忠実に記録し、わかりやすい民俗生活の記録となっている。

本書は、民俗調査による津軽地方の貴重な民俗資料の記録である。

（A5判、九〇六＋xxⅲ頁、二〇一〇年三月刊、弘前市、非売品）

（おおゆ・たくじ　青森県埋蔵文化財調査研究センター職員）

故郷への想いを新たに

―『新編弘前市史　資料編　岩木地区』（歴史編）の刊行に寄せて―

末永　洋一

一　本書刊行の位相

いわゆる「平成の大合併」で、青森県内の市町村もそれまでの六十七

市町村から四十市町村へと減少し、多くの町村が「消滅」した。岩木町もその一つで、相馬村とともに弘前市と合併し、行政上は「弘前市岩木町」となった。岩木町は、昭和二十～三十年代に推進された「昭和の大合併」の際に、駒越村、大浦村、岩木村の三村が合併することで形成されたが、その歴史に幕を下ろしたことになる。

ところで、「平成の大合併」が推進されていた時、建前としては「対等合併」であろうとも、事実上は「吸収」されていくこととなる町村側が心配したのが、広域化に伴う行政サービスの低下と「地域アイデンティティ」の喪失であった。前者については、昨今の情報化の進展や旧町村に支所や出張所などを設置することにより一定程度は解決が可能であったが、問題は後者であった。永年にわたって「故郷」としていた町や村がなくなる（少なくとも行政上における呼称として）ことは、その地の住民には何とも言えぬ寂しさを感じさせるものとなる。そのことが、やがては「俺が生まれた村」、「私が育った町」を忘れてさせていくこととなり、自己と故郷の関係性を喪失させていくこととともなろう。地域へのアイデンティティを失うことは、地域への誇りや地域への情熱を失わせて、地域産業や地域振興、地域創造などとの関係を失わせることともなりかねない。市町村合併が広域化すればするほど、また合併の中心となる都市部が有力であればあるほど、その可能性は高くなるとも言えよう。岩木町も決してその例外ではあるまい。

では、こうしたことに対処する方策はあるのか。その一つの方策が、地域の文化、歴史、生活などを記録・継承し、時に触れてそれを紐解くことにより、自らの「地域アイデンティティ」を確認することであろう。そうした意味において、地域の歴史、文化、生活をしっかりとした立場から記録しておくことは極めて重要な課題である。

さて、このように考える時、本書はこの課題に対する一つの回答を与えたと言えよう。旧岩木町民が自己を振り返る時、地域を思い地域の発展を考える時、本書はその一つの導きを与えてくれるものであるからだ。さらには、同時に、弘前市や旧相馬村の住民が本書を紐解くことで、新・弘前市の融合化を促進することともなるであろう。そうした意味において、旧岩木町民はもちろん、新・弘前市民はぜひとも本書を紐解いて欲しいものである。

二　本書の特長

本書は合計九百三十ページ余に及ぶ大著であるが、本編の五分の四以上の紙幅を当てているのが、「Ⅳ　近現代の岩木」と「Ⅴ　民俗」である。一見、ある種の時代的「偏り」とも思える編集であるが、決してそうではない。近現代史の量が多いのは、監修の労を取られた長谷川成一弘前大学教授が述べられているように、「旧岩木町から要請を受けたこと」も一因だが、「近現代」こそ、地域住民がもっとも身近にアイデンティティを感じる重要な時代であり、したがって、「町の消滅」という歴史的転換期にあっては、そこにこそ多くのページを割くことは重要であろう。また、民俗にかなりの紙幅を当てたことについては、同じ長谷川教授によれば『津軽は民俗の宝庫』とは、よく耳にする言葉であるが、『新編弘前市史』に民俗調査の成果が全く反映され」ず、今回は

「その欠を補う」という意欲の現れであるとされるが、これも見事に成功している。本書の最大の特長は、まさに、住民にとってもっとも身近な歴史・文化・生活等を振り返る貴重な空間と時間を提供するものであることだろう。

三　本書の内容と構成

こうした特長をもつ本書であるが、本編の構成は次のようになっている。

Ⅰ　考古
Ⅱ　編年資料
Ⅲ　近世の岩木
Ⅳ　近現代の岩木
Ⅴ　民俗

以下、その内容について簡単に紹介しよう。

Ⅰ　考古

ここでは、旧岩木町におけるこれまでの考古学的調査を紹介した後、代表的な遺跡として原始古代六件、中世三件を紹介している。

Ⅱ　編年資料

ここでは、十四世紀初めから十七世紀中葉までの百五十五点に及ぶ資料を、「全体のボリュームが大幅に縮小されることになった」ために、「綱文（諸資料によって確定し得た、歴史的事柄を要約した文）を立て」ることで配列している。読者にはあるいはある種の戸惑いを感じさせることともなろうが、解説も手際よくまとめられており、本部執筆者の苦渋と努力を感じさせるものである。

Ⅲ　近世の岩木

「［弘前］藩政に関わっての資料と民衆生活を窺える資料」の二章からなる。「藩政に関わる資料」を紹介する「第一章弘前藩と岩木」にあっても、単に藩政の羅列ではなく、岩木という農村の変容や農民生活などとの関わりを中心として紹介しており、民衆生活を紹介する「第二章『金木屋日記』に見る岩木」と通底する編集となっていることは重要である。「金木屋日記」は農村の庶民生活を彷彿とさせてくれる。

Ⅳ　近現代の岩木

多くのページを当てられているのが本部であるが、そこでは、以前刊行された『岩木町誌』との重複を避け、戦後史を重視して「岩木町民の生活記録ともいうべき資料を…掲載し」ている（第二章解説）。五章編成であるが、特に、明治期の岩木山麓の開拓や今も継承されている岩木山信仰の原点でもある岩木神社の知られざる側面を紹介する「第一章明治期の岩木」、太平洋戦争下における「三上重蔵日記」から末端行政組織の対応や庶民生活を浮かび上がらせる資料を掲載する「第二章岩木村の戦争体験」、戦前から戦後における地域の青年層や子供の「日常性」にスポットを当てた「第三章山ろくの子供と青年」は是非とも読んでも

らいたいところである。

なお、ここで若干注文を付ければ、一、大正期の岩木が全く見えない、二、弘前市との合併に当たり旧岩木町そして町民とにどのような約束（「新市建設計画」など）がなされたかを旧岩木町からの視点で取り上げておくべき、の二点である。

Ⅴ　民俗

第Ⅳ部「近現代の岩木」と並んで重要なのが本部である。先に触れたように、本部は「民俗の宝庫」の扉を開き、「宝」を探り当て、住民と共有しようとの試みである。筆者は常々、自治体史に見られる「民俗」編には、その叙述が「非歴史的」であり、「お国物語」であることもあり、いささか懐疑心を持ってきた。しかし、本書はそうした類のものではなく、文書資料を中心とする近現代史の欠を補う、いわば「オーラルヒストリー」的な存在となっている。旧岩木町を構成した三つの集落（岩木、駒越、大浦）について丹念に聞き取り調査をした成果が現れていると言えよう。

四　「通史」でさらなる成果を

全体として、本書はその目的である「岩木地区の歴史像の構築を目指す」（あとがき）ことに成功している。それは、旧岩木町という農村を民衆的視点から記録したことが最大の要因であろう。近現代を重視し、「宝庫」を開いていく時、そこには常に民衆、生活者が居るからである。今後、本書などを基盤として「通史」が編集されるとのことである。住民がそれを読み、自らの地域を振り返り、明日への展望を持つことが出来るような、すなわち「地域アイデンティテイ」の拠り所となるような、そんな「通史」が出版されることを祈念して止まない。

（すえなが・よういち　青森大学学長）